

黙示録19章7－9節 「子羊の婚姻」

1A キリストに結ばれた者たち

1B 真実な愛

2B 修行ではなく契約

2A 今を生きる葛藤

1B 新しくされた自分

2B 残存する古い人

3A 結婚を待つ私たち

1B 親による見合い

2B 婚約

3B 引き取り

5B 婚姻と婚宴

6B 床入り

4A 「わたしを愛しますか？」

1B 「憎しむ」という意味

2B 茨の中のゆりの花

3B 主を愛さない者への呪い

本文

黙示録 19 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週で 18 章まで来ました。午後礼拝で、19 章全体を一節ずつ学びます。今朝は、7-9 節に注目します。「⁷ 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから。⁸ 花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」⁹ 御使いは私に、「子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ、と書き記しなさい」と言い、また「これらは神の真実なことばである」と言った。」

私たちは今月、教会のみなさんの手作りで、結婚式を用意しました。いつも会っている仲間であり、そして、いつも目にしている結婚式の式辞であり、司式の文言も同じです。けれども、涙腺がゆるみました。それは、主の前にいることに厳かさがあるでしょう。ここに、神が定められた、神と私たちとの関係の雛形があるからです。

今、私たちが読んだ箇所は、まさにそのことが実現する場面です。主が地上に戻ってこられる前に、天において、子羊との婚礼で、整えられた聖徒たちの姿がありました。それは花嫁の姿でした。これがキリストの教会の姿です。天から降りて来られたイエスによって引き上げられた教会が、今、

子羊との婚姻にあずかっているのです。

1A キリストに結ばれた者たち

私たちが、キリストを信じたことを告白する、水のバプテスマは、まさにキリストにつくことを意味します。「ロマ 6:3-5 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。5 私たちがキリストの死と同じようになると、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。」女が、結婚によって男と一体になるように、キリストに自分が結び付きます。ゆえに、この方が死なれた時に、自分の古い人が死にます。この方がよみがえられた時に、私たちは新しく生まれます。そして、からだが生んでもまたよみがえります。

そして、パウロが、コリントにある教会に対して書いた時に、キリストと婚約させたという言い方をしています。「2コリ 11:2 私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。」そして、エペソ 5 章でも、夫と妻に対する勧めをパウロがした時に、教会のことを語っています。「エペ 5:26-27 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いををもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」

1B 真実な愛

ですから、大事なものは関係であることが分かります。そして、関係といっても、決して破ってはいけけない堅い契約、あるいは誓約に基づいています。そこに真実な愛があることを、聖書は証しています。もし、自分の都合で選べるのであれば、とっかえひっかえ、付き合う人を取り替える女のように、そこには愛がありません。

日本では、イエスのことを信じることはできるが、イエスだけを信じることに抵抗を覚える人が多いです。そして、キリスト教は一神教であるから排他的で、日本は多神教だから寛容であるような意見があります。けれども、今、説明しましたように、真実な愛は排他的です。たった一人の人に一回に尽くすからこそ愛があるのであり、ある時はこの神、またある時はあの神としたら、そこに何か誠実な関係があるでしょうか？

2B 修行ではなく契約

そしてもう一つ、日本の人たちにありがちな宗教観は、修行です。これは、信仰をもってからの過ちに陥りやすいです。自分が、祈りや聖書で修練を積んで、それで霊性の高い人になるのだと

いう理想が、心のどこかに抱いています。けれども聖書は、そんなことを教えていません。

聖書は、神がいかに関心をもち、そして契約を結んでくださったかを教えています。主が関係を私たちと結び、そして契約によって動いてくださいます。そこで私たちは、神の作品なのです。私たちを見れば、神がいかにご自分の恵みを現わしているかの、作品を見ることができるのです。「エペ 2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」

2A 今を生きる葛藤

ですから、大事なものは関係であり、私たちはそれぞれ、キリストに結ばれた者です。けれども、その関係には、一定の緊張があり、葛藤があります。

1B 新しくされた自分

私たちは、キリストにあって罪が赦され、また新しく造られた者です。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

2B 残存する古い人

ところが、相変わらず、自分は古いままだと感じるのです。古いものは過ぎ去って、すべてが新しくされたと言っても、以前と変わらないのではないか、と思うのです。

3A 結婚を待つ私たち

実は、この葛藤は、主にあって想定済みなのです。私たちは、神の救いについて、「既に、未だ」という時間軸を覚えておくといえましょう。すでに救われたのです。けれども、未だ救われていないのです。分かり易く言えば、主の目から見たら、あるいは霊的には救われているのです。けれども、その救いが完成するのは未だ、なのです。すでに新しくされているのですが、その新しさが目で見える形で実現するのは、将来を待たないといけません。

それで、私たちはいつも、緊張状態にあります。パウロはこれを「うめく」という言葉を使っています。「ロマ 8:23 それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだを贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」すでに御霊によって新しくされ、すでに神の子どもなのです。けれども、それが実体化する、目に見えるのは、からだを贖われる時で、それは主が戻ってこられる時であります。それで、望みを抱いて、うめいているのです。

これがまさに、「婚約」という状態です。すでに結婚することは約束しました。けれども、まだ結婚していません。それで、お気づきになったでしょうか、先に引用した、教会についてのみことばは、すべて婚約した花嫁のことなのです。「2コリト 11:2 私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。」はっきりと花嫁だと言っていますね。「エペ 5:26-27 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」こちらも、これから結婚する花嫁としての準備の話をしています。そして黙示録の終わりは、「御霊と花嫁が言う。『来てください』(22:17)」

1B 親による見合い

ここで知らないといけないのは、当時のユダヤ教の結婚の段階です。初めは、結婚を両側の親が取り決めることです。まだ小さい男の子、女の子の時に決めます。ですから、マリアがヨセフと婚約していましたが、「ヨセフという人のいいなずけ」とルカは説明しています(1:27)。

2B 婚約

次にいわゆる婚約の段階に入ります。相手への貞潔が試されます。一年間です。今の婚約とは異なり、法的に結婚と同じようにみなします。花嫁料を払います。この時に、マリアが懐妊したので、律法によれば石打なのですが、ヨセフは内々に離縁しようと思ったのです。

3B 引き取り

そして、花婿が花嫁を引き取りにきます。行列を作って、花嫁の家に向かいます。マタイ 25 章にある、十人の娘の喩えはその時の様子です。そして、花嫁が花婿の家に行き、婚宴に入ります。父の家に、息子が嫁を迎えるための住まいを用意します。すべてが整ったけれども、父が許さなければ息子は花嫁を迎えに行けません。父のみがその時を知っているのです。何か、聞き覚えがありませんか？そうです、イエスは神の息子として、時は分からないと言われたのです。「マタ 24:36 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」

そして花嫁は、自分の家で花嫁衣裳を着て待っています。いつかは分かりません。花婿の父が行きなさいと言います。それは夜中です。そして村の人々は角笛や他の楽器で、夜中なのに大きな声を上げて、花婿の行列について行きます。そして、花嫁は、神輿のようなものに乗し、そこに座って、かつがれます。娘たちと共に花嫁は花婿のところに引き取られます。これは、主ご自身が天から降りて来られる時の姿であります。「Ⅰテサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、

空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

5B 婚姻と婚宴

そして家に入り、七日間の婚礼が続きます。ヨハネ 2 章の、水をぶどう酒に変えた奇跡は、そのような婚宴で行われました。この時にはすでに、父の家には、新しい嫁が住むための部屋が拡張して加えられています。このことを思っ、イエスは弟子たちに言われました。「ヨハネ 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」

そして七日の婚礼の時ですが、これは主が地上に来られてから、地上の神の国での祝宴で実現するのではないかと思います。ここでは「**子羊の婚宴に招かれている者たちは幸い**」と言っています。祝宴については、イエスがこう語られています。「マタイ 8:11 **あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。**」

6B 床入り

そして、夫婦は部屋に入り、初の夜、床入りをします。これで結婚が完成します。黙示録 21 章を見れば、天のエルサレムを見ることができます。その都が、「子羊の妻」と呼ばれています (21:9)。

4A 「わたしを愛しますか？」

このように、私たちの主への愛は強烈なものです。そして熾烈なものです。この神聖な愛、だれもが立ち入って侵すことのできない愛があります。

あるアメリカ人の宣教師の友人から、日本人の宗教観について、どう対処すればよいのか質問を受けました。「先祖供養について、どう説明したらよいか？」そうです、先祖を敬うということと、先祖を拝むことには、雲泥の差があります。そこで、私は説明しました。「ある夫婦の家があります。そこに、外部の人を招きます。外部の人は居間に招きます。けれども、決して決して、夫婦の寝室に招くことはしません。」そうですね、これは先祖を敬うことです。「けれども、もし、あつてはならないことですが、夫婦が寝る寝台に、いきなり外部の人が真ん中に入ってきたらどうしますか？」これは、確実に姦淫です。これが、先祖供養になります。つまり、死者の霊に仕えているのです。神以外の霊に仕えているのです。

このように、私たちには大切なことがある。そして大切な人がいます。けれども、その人たちを、主にあつて敬つても、主の愛に代えることはできません。イエスは、ペテロに、「わたしを愛しますか？」と三回、尋ねられました。それは、どんなものよりも、わたしを愛しますか？という問いかけです。主の愛は、他の何にも代えることのできないものです。

1B 「憎む」という意味

ですから、主は、「憎む」という言葉を使われました。「ルカ 14:26 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」大切な人々でも、イエスに取って代われれば、もうそこには愛はありません。花嫁の、花婿への愛はありません。だから、家族のことは、いや自分のことも第一の座から退いてもらい、それでイエスを第一の方とするのです。その選択がまさに、「憎む」ということです。日本語で、「心を鬼にして」という言葉がありますね。それです、どんなに大切でも、イエスより大切にしないという厳しい決断です。

2B 茨の中のゆりの花

その激しい愛においては、どんな見目麗しいものも、自分には取るに足りないものになります。ソロモンには、数多くの妻、またそばめがいましたが、雅歌によると、ひとりのシュネムの女を本当に愛していました。それで、彼女のことをこう表現しています。「雅 2:2 わが愛する者が娘たちの間にいるのは、茨の中のゆりの花のようだ。」他の、かわいい若い女性たちは、茨と言い切っているのです！これが、主への愛です。

3B 主を愛さない者への呪い

そういったことから、パウロが言った、主への愛の激しさを見てみましょう。「Ⅰコリ 16:22 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。」主を愛さない者は、のろわれよとまで言っています。そして、主よ、来てくださいと願っているのです。これが、花嫁が花婿を待つ姿です。もう一度、イエスがペテロに言われたみことばを思い出しましょう、「あなたはわたしを愛しますか？」